



都城茶を入れる西田正美さん

島津茶園 西田 正美営業部長

都城の特産品である都城茶。特徴は透き通った黄色と、深蒸し茶より強い香りだ。その特徴を生み出すのは、茶葉の蒸し時間を短くする「普通蒸し（若蒸し）」という製法。普通蒸しにすることで茶葉は一本一本針のようにとがり、真っすぐ伸びる。

都城茶の歴史は江戸時代にさかのぼり、都城島津家と深い関係がある。都城島津家の藩医であった池田貞記（ていき）が、「天下一の茶どころ」とされる京都・宇治と都城がともに盆地で、昼夜の温度差が激しい点などに着目。自ら学んだ茶の栽培や製法を持ち帰り、生産技術を高めたためだ。

1757（宝暦7）年には、貞記の弟子たちが当時の天皇に都城茶を献上した。これにより江戸で

も有名になり、銘茶となったという。

島津家ともかかわりのある島津茶園（都市市姫城町）の営業部長、西田正美さん（51）は「長年栽培してきた経験を生かして質の高い原料にこだわり、味や香りをブレンドしてお茶を作っている。多くの人に知ってもらいたい」と自信をのぞかせた。

今も都城茶の評判は高く、「県の品評会で上位を独占している」と都市市農産園芸課の八十島洋一さん（41）。現在抱える課題は、茶を生産したり販売する人たちが高齢化で減少していることという。八十島さんは「全国の品評会に都城茶を出品することで、より有名にする手助けをしていきたい」と述べた。

（小城桃穂）

銘茶高い生産技術守る



都城泉ヶ丘高（都市市）

都城島津の伝統脈々

島津邸本宅の前に立つ山下真一さん



都城島津伝承館 山下 真一館長

膨大な史料 後世に発信

しかし、開館時と比べると来館者数は減少し、年齢層は高齢者の割合が高いという。「若い人を引き付ける取り組みをしたい。中高生にも、歴史に関わるような仕事に就きたいと思ってもらえれば」と目標を掲げた。来館者を増やすことで発信力の向上につなげたい考えた。

（脇屋いずみ）

の歴史を知ってもらおうと、東京の史料館と協力して文化財の貸し借りも行っている。伝承館では、今に至るまで多くの工夫を積み重ねてきた。例えば、文化財を展示する際、史料が傷むのを防ぐために文化庁や東京文化財研究所に相談し、温度や湿度の変化に対応できる特殊なケースや照明を取り入れている。

日本の伝統的な衣服である着物は気候や風土、用途に合わせて作られており、生活に密着している。例えば、島津邸にも展示されている陣羽織は袖がなくて、機能性を重視していた。また、気候の温暖な都城では着物の生地が薄く、沖縄や奄美大島では、農作業で着ても防虫や消臭効果がある。

呉服の丸中

中野 竜英専務

着物に凝縮 生活の知恵



高いように泥染めをした。こういった着物作りの技術は、現代にも受け継がれている。創業43年を誇る「呉服の丸中」の中野竜英さん（56）と母恵子さん（80）に話を伺った。専務の竜英さんは「着物にはいろいろな模様があり、それらのひとつひとつに縁起や厄よけなどそれぞれの意味が込められている。その意味を理解して、身に付けてほしい」と話した。

また「着物は生活の知恵が詰まった大切な日本文化の一つで、自分の気持ちを表現できるものでもある。着物を通して日本の伝統文化を伝えていきたい」と決意を語った。呉服の丸中では、着物や浴衣にあまり縁がない人に向け、手頃な価格でレンタルしている。最後に中野さん親子は「着物を楽しんでほしい」と話していた。

（戸高瑠菜、税所愛莉、川畑瑠奈）

「着物を通して伝統文化を伝えたい」と話す中野竜英さん

文化の祭典 来年7月開幕

国民文化祭（国文祭）と全国障害者芸術・文化祭（芸文祭）は、各都道府県持ち回りで開いている全国最大級の文化の祭典。新型コロナウイルスの影響で来年7月3日～10月17日の107日間に延期となった。

「記紀・神話・神楽」「国際音楽祭」「若山牧水」「宮崎の食文化」が四つのメインテーマとなっている。

国文祭のうち、コンサートや演劇、美術展など130あまりの事業は「分野別プログラム」と呼ばれ、各市町村と文化団体が共催する。

芸文祭は全11事業。7事業は新たな日程が決まり、残る4事業は調整中。

記事、写真は都城泉ヶ丘高新聞部（脇屋いずみ部長、5人）が執筆・撮影しました。